

民友社文学

民友社文学・作品論集成

平林 一十山田博光 編

作品論集成

民友社

民友社文学・作品論集成

民品論

民友社文学・作品論集成

1992 年 3 月 31 日 第 1 版第 1 刷発行 Printed in Japan

編 者 平 林 一
 山 田 博 光
 © 1992 年

発 行 者 畠 山 滋

印 刷 所 株式会社 厚 徳 社

製 本 所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東 京 都 文 京 区 本 郷 2-11-3

電 話 03 (3812) 3131 ~ 5 番

振 替 東 京 9 - 84160 番

郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

ISBN4-380-92214-6

民友社文学・作品論集成

第一部 民友社の人たち（自伝・回想・小説）

- | | | | |
|---|--------------|------|----|
| 1 | 蘇峰自伝（徳富蘇峰） | 平林 一 | 9 |
| 2 | 思ひ出す人々（内田魯庵） | 山田博光 | 21 |
| 3 | 富士（徳富蘆花） | 吉田正信 | 30 |

第二部 評論・史論

- | | | | |
|---|------------------|------|----|
| 1 | 将来之日本・新日本之青年（蘇峰） | 中村青史 | 43 |
| 2 | 吉田松陰（蘇峰） | 中村青史 | 52 |
| 3 | 静思余録・文学断片（蘇峰） | 榎林滉二 | 63 |
| 4 | 明治文学史・他（山路愛山） | 山崎國紀 | 72 |
| 5 | 現代日本教会史論（愛山） | 岡 利郎 | 84 |

6	新日本史(竹越三叉)	西田 毅	93
7	第二之維新(人見一太郎)	和田 守	107
8	読史余録(塚越停春)	青木 稔弥	116
9	社会の罪・他(森田思軒)	喜多川恒男	126
10	今日の小説及び小説家・他(魯庵)	堀井哲夫	135
第三部 文集・ルポルタージュ			
1	自然と人生(蘆花)	神田重幸	145
2	新聞記者之十年間(平田久)	小倉 齐	154
3	最暗黒之東京・社会百方面(松原岩五郎)	一條孝夫	163
第四部 詩・小説			
1	湖処子詩集(宮崎湖処子)	野山嘉正	175
2	独歩吟(国木田独歩)	中島礼子	184

3	帰省（湖処子）	森 英一	195
4	人寰・半生の懺悔（湖処子）	山田博光	204
5	不如帰（蘆花）	畑 有三	213
6	思出の記（蘆花）	吉田正信	223
7	黒潮（蘆花）	佐藤 勝	233
8	くれの廿八日（魯庵）	片岡 哲	242
9	武蔵野（独歩）	北野昭彦	251
10	源おぢ・忘れえぬ人々（独歩）	北野昭彦	261
11	牛肉と馬鈴薯・春の鳥（独歩）	芦谷信和	271
12	酒中日記・運命論者（独歩）	滝藤満義	281
13	窮死・竹の木戸（独歩）	小島幸隆	291
あとがき		平林 一・山田博光	303

執筆者（掲載順）

平林 一 愛知女子短期大学

山田博光 帝塚山学院大学

吉田正信 愛知教育大学

中村青史 熊本大学

槇林滉二 広島女子大学

山崎國紀 花園大学

岡 利郎 上智大学

西田 毅 同志社大学

和田 守 大東文化大学

青木稔弥 松蔭女子学院大学

喜多川恒男 大谷大学

堀井哲夫 京都女子大学

神田重幸 東洋大学短期大学

小倉 斉 愛知淑徳短期大学

一條孝夫 帝塚山学院短期大学

野山嘉正 東京大学

中島礼子 国士館短期大学

森 英一 金沢大学

畑 有三 専修大学

佐藤 勝 帝京大学

片岡 哲 東京工業大学附属工業高校

北野昭彦 大谷女子大学

芦谷信和 立命館大学

滝藤満義 横浜国立大学

小島幸隆 帝京大学院生

第一部 民友社の人たち（自伝・回想・小説）

1 蘇峰自伝（徳富蘇峰）

平林 一

（1）

『蘇峰自伝』（以下『自伝』とする）が刊行されたのは一九三五年（昭和10）九月である。一九三五年前後の数年間は、大日本帝国の進路が決定された期間である。国際連盟脱退（一九三三）、二・二六事件（一九三六）、日独防共協定成立（一九三六）、日中戦争開始（一九三七）とつづく歴史過程がそのことを示している。この時期は一方でいわゆる「文芸復興」期とも言われ、文運隆昌の現象をまねいていたが、やがて非常時局のもと、戦時下の文学へと転移していったのである。『自伝』刊行の翌年一月五日、蘇峰に対する文章報国五〇年祝賀会が帝国ホテルで行われている。明治・大正・昭和の三代にわたるジャーナリストの大先輩として祝賀されたのであり、自伝刊行の前後数年は、蘇峰の生涯にとって一つの頂点ということも出来よう。この時、蘇峰は大阪

毎日新聞社・東京日日新聞社社員であり、大日本国史学会会長であった。

『自伝』成立・刊行の経緯は巻頭の「自伝の縁起」に記述されている。それによれば、自伝記述は『還暦を迎ふる一新聞記者の回顧』（中央公論）一九二三年一月）にはじまる。次は、日清戦争・遼東還付までの自伝が「改造」（一九二九—三〇）に掲載された。その後、中央公論社長嶋中雄作からの自伝刊行の促しがあり、古稀（一九三二）に至るまでの自伝が成立したのである（蘇峰口授・八重樫東香筆記）。

この『自伝』の性格を蘇峰はつぎのように伝えている。

理りておく。これは固より懺悔録でない。又た弁明書でもない。唯だ予が思出の儘を、その折々に書きつけるものである。固より世間の人に示さんが為でなく、又た子孫に伝へんが為でもない。謂はゞ自問自答、自語自聴に過ぎない。（3頁）

この自己独白的自伝は二十一章の構成になっており、各章の末尾にはその時々の蘇峰の漢詩が記入されている。また、全編の最後には、「蘇峰著作及び編纂目録」がつけ加えられている。

この二十一章にわたる『自伝』を、筆者の立場から大きくわけると五つの部分になると考えられる。その第一部は、出生から民友社創立まで（一八六三—八七）。第二部は民友社創立から日清戦争後まで（一八八八—九五）。第三部は蘇峰の欧米旅行から桂太郎の死に至る期間（一八九六—一九一三）。第四部は修史の時代（一九一四—三二）。第五部は蘇峰の著作・文章及び自己解剖の記述である。

以下、五つの部分にわたって問題点を考察し、『自伝』の解明としたい。

第一部は、若き蘇峰における自己形成の期間と考えることができる。

蘇峰の生家徳富家は、江戸時代、肥後の国水俣郷・津奈木郷の惣庄屋兼代官をつとめた豪農であつた。豪農の子蘇峰の読書は、漢詩・漢文から始まつている。

予は何時頃から読書を始めたかを覚えてゐない。併し最初は唐詩を習つたやうだ。それは母の膝の上にて、『月落烏啼霜滿天』の外、少し長きものでは謝疊山の『雪中松柏愈青青』という詩杯は、その時に覚えたもので、六十年後の今日も猶ほ記憶してゐる。(略) それから追々『大学』、『論語』等は母から教はつたやうである。(28頁)

江戸時代に至るまでの日本文化は、中国を中心としたアジア文明圏の中にあつた。明治時代に至り、「脱亜入欧」という説が叫ばれ、強く西欧文明の影響下に入ることになった。幕末から明治一〇年代にかけて自己形成をとげた蘇峰は、漢学的教養の上に洋学的教養を上積みしていった。一つの大きな文化的転換期において、若き蘇峰の言論と行動は、一つの普遍的な型をもっている。その消息を『自伝』は鮮やかに伝えている。

家庭の教育につづいて村塾（高野塾・元田塾・竹崎塾・兼坂塾）時代がやってくる。さらに熊本洋学校・同志社での修学がつづいた。学校教育という点から蘇峰が深い影響を受けた教育が二つあった。蘇峰は回顧している。

兼坂先生の塾に於て、予は平民主義の何者たる乎を体得したる心持がした。／同志社に於ては、予は人格主義の何者たる乎を体得したる心持がした。一は兼坂先生に負ふ所であり、他は新島先生に負ふ所である。(108頁)

少年時代に体得した「平民主義」と「人格主義」は、蘇峰生涯の基幹をなしたと考えてよい。蘇峰は明治・大正・昭和三代にわたるジャーナリストであつた。蘇峰は新聞記者志望を何時からもつようになったか。

……予は何時頃より新聞記者たらんと心掛けたる乎。明白に意識してゐない。併し熊本に居る当時よりその志があり、明治十年——予が十五歳の時——の初には、已にその志が確立してゐたと云ふことを疑はない。(92頁)

一八七七年(明治10)といえ、同志社在学時代である。一八八〇年四月、同志社退学後上京したが新聞記者への志果せず、捲土重来を期して熊本に帰つた。大江義塾創立(一八八二年三月)以後、民友社創立(一八八七年二月)に至る期間、蘇峰の交友人脈は多彩となる。そこには、板垣退助・中江兆民・馬場辰猪・福沢諭吉・田口卯吉・中村敬宇・河野広中・島田三郎・片岡健吉・大隈重信・陸奥宗光・矢野文雄らの人々がいる。

その中の一人馬場辰猪から「真に政治の運用を知るには、政治家の伝記を読まねばならぬ。それには先づ斯る本を一読あれ」(180頁)と言って、コブデン伝(モルレー卿)とビーコンスフイールド評伝を与えられた。これは蘇峰にとって何を与えられたことになるか。つぎの記述は貴重である。

この二書は予にとつて天啓であつた。予はこれによつて初めて、ロード・モルレーを知り、コブデンを知り、ブライトを知り、(略)マンチェスター・スクールを知る事が出来た。元来予の政治思想は、横井小楠から発足し、新島先生の基督教の感化を受けたものであつて、マンチェスター・スクールの論旨が予に感応したるは、恰も水乳投合したる趣があつた。(181頁)

マンチェスター学派の自由主義への開眼とともに、蘇峰の政治思想の系譜を知ることができる。それのみでなく、後年、民友社『十二文豪』の叢書刊行の基礎となるばかりでなく、蘇峰が伝記・評伝を執筆する基礎に、辰猪からの二書の贈与がなつてゐると思われて仕方がない。

(3)

第一部が言論人として自己確立に至るまでの、若き蘇峰の記録というならば、第二部・第三部は、言論による政治への積極的参加の期間といふことができよう。

蘇峰は若き日から政治に強い関心をもつていた。

予は本来政治が好きであり、政治が予の生命であつた。(略)平たく云へば当初から大臣希望者でもなく、又た議員希望者でもなかつた。予は唯だ世の中の政治を吾が思ふ様に動かし導かん事を欲したる迄にて、それ以外には何等の功名心も無ければ、名譽心も持たなかつた。併し極めて微力ではあるが、世の中を予の是なりと思ふ方に導かんとする志は、若しこ

れを野心と云ふならば、その野心は燃ゆるが如くであつた。(224—225頁)

蘇峰の政治に対する野心は右のようなものであつた。

『将来之日本』を刊行し(一八八六)、民友社創立により「国民之友」を發刊した(一八八七)蘇峰は、言論界の若き旗手であつた。そうした蘇峰が日清戦争(一八九四—九五)に至るまでのよつて立つ論理は、周知の通り平民主義であつた。その立場から、彼は改良主義をとり、藩閥政府批判を実行した。「国民新聞」發刊時(一八九〇年二月)を語る『自伝』の箇所は、その事情をよく伝えている。

併し當時に於て、予の主なる目的は、此の新聞を以つて改良の目的を達せんが爲であつた。當時予の最も熱心であつたのは、第一、政治の改良。第二、社会の改良。第三、文芸の改良。第四、宗教の改良であつた。

而して『国民新聞』は、以上の改良に向つて、自ら急先鋒を以つて任じて居た。その中^{うち}にても、政治の改良が予の最も熱中する所であつた。

如何にして政治を改良する乎。予の當時の意見は何よりも先づ藩閥政府の打破であつた。(265—266頁)

明治政府批判の言論を實踐しながら、一方において、井上馨・大隈重信・松方正義・陸奥宗光らに接触する情況が『自伝』には記述されており、時代の証言となつてゐる。

日清戦争が到来した。これは蘇峰に転機をもたらした。

明治二十七八年戦役は、日本の歴史にとつても、又た予一個の歴史にとつても、孰^{いづれ}れも重